

⑧ めざすのは部活動と家庭学習の両立！ —中学生の放課後活動



Benesse 教育研究開発センター 研究員 佐藤暢子

中学生の活動の特徴はスポーツと家庭学習

私たち大人がかつてそうであったように、今も多くの中学生が「勉強と部活動の両立」を掲げて日々を過ごしているようです。中でも芸術系に比べて運動系の部に所属をしている割合が高くなっています。

定期的にスポーツに励む子どもの割合は、幼児期から小3生まで、上昇を続けます。しかし、小4生から減少しはじめて、小6生では63.3%にまで低下します。中1生では72.5%と小学校中学年の水準に戻り、中2生から再び低下します（図8-1）。

また、教材などで家庭学習を行う割合（ただし学校の宿題、予習、復習は除く）も、小6生から中学に上がるタイミングでの上昇が大きくなっています。家庭学習の活動率は小6生では68.5%ですが、中1生では74.5%、中3生まで同程度の水準が保たれます（図8-2）。

活動の場は民間・地域から学校の部活動へ

スポーツ活動は子どもが幼児・小学生のうち、民間企業や地域が経営する教室において行われているケースがほとんどでした。しかし中学生になると、その担い手はがらりと様変わりします。

スポーツ活動を行っている子どもが所属する団体は、小学生では民間経営によるものが55.1%、地域ボランティアや自治体などによるものは合わせて23.9%を占めています。これに対し、中学生では民間経営が16.5%、地域ボランティアや自治体などによるものは8.9%に減少します。かわりに学校の部活動が61.3%と多くを占めるようになります（表8-1）。

芸術活動に関しては、学校段階の変化に伴う活動率の変化はスポーツや家庭学習ほどではありませんが、その担い手となる団体を見ると、中学からはスポーツと同様に、学校の部活動の存在感が急上昇します。民間経営39.5%に対し、学校の部活動が36.1%と、順位が逆転をするほどではないにしろ、ほぼ同水準にまで達します（図表省略）。

また、中学生になると活動の種類が多様になるという特徴があります。たとえば、小学生のスポーツ活動は、スイミング、サッカー、野球の3種目で5割以上を占めますが、中学生ではテニス、スイミング、野球、卓球、バスケットボール、陸上の6種目でおおよそ5割となります。これらのうちスイミングを除く5種目は、活動の担い手の中心は学校の部活動に移ります（図表省略）。

スポーツへの期待が変化—体力づくりから社会性の涵養へ—

スポーツの効用はさまざまです。体力や技能の向上、健康増進といった身体的な面にとどまらず、精神的な充実をもたらすという側面も重要です。さらには他者とのコミュニケーションを通じた社会的態度の涵養も多くの人が指摘するところです。

今回の調査では、母親たちに子どものスポーツ活動に期待することをたずねています。16の項目を提示した中で、小学生の母親にもっとも支持されたのは、子どもが「じょうぶで健康な身体になる」ことでした。中学生の母親では、「じょうぶで健康な身体になる」は10ポイント近く下がり、「自分の目標に向かって努力する」がもっとも期待の大きい項目になりました（表8-2）。

基本的には学校段階が上がるにつれて、多くの項目で期待の度合いが下がる傾向にありましたが、小学生から中学生に上がっても、期待の度合いがあまり変わらない項目や、逆に上昇する項目もありました。

具体的には、「仲間と協力する姿勢を身につける」ことや、「人に対する礼儀やマナーを覚える」「集団をまとめる力やリーダーシップを身につける」などです。中学生の母親たちは、スポーツ活動に社会性の育成を期待しているようです。

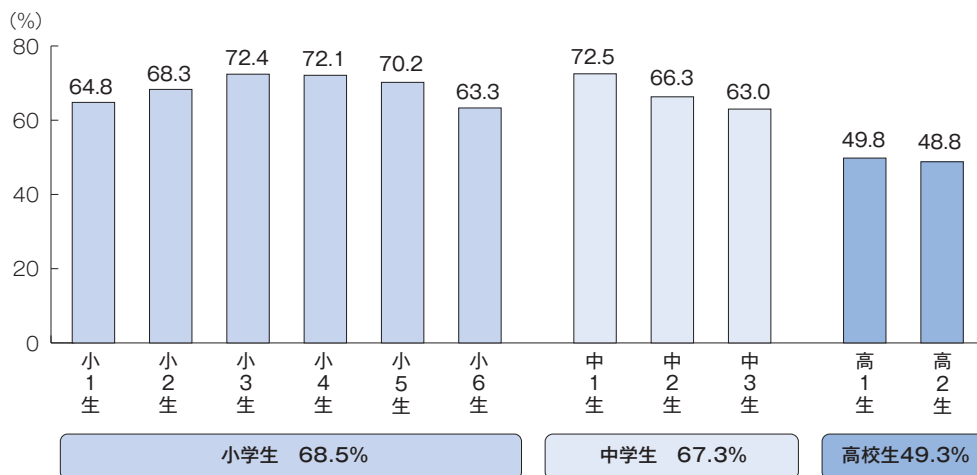
しかしながら、スポーツの活動率は、図8-1で見たように、中1生をピークに学年が上がるごとに減少していき、中3生では63.0%と中1生より9.5ポイント減少します。そして高校生になると大きく減少して、半数を割り込みます。

さらにいえば、家庭学習活動、塾・教室へ通う割合も、中学生に比べて高校生は大きく減少します（『子どものスポーツ・芸術・学習活動データブック』より）。そのような学年による推移からも、中学生時代は、スポーツと勉強の両立に奮闘する時期であるといえそうです。



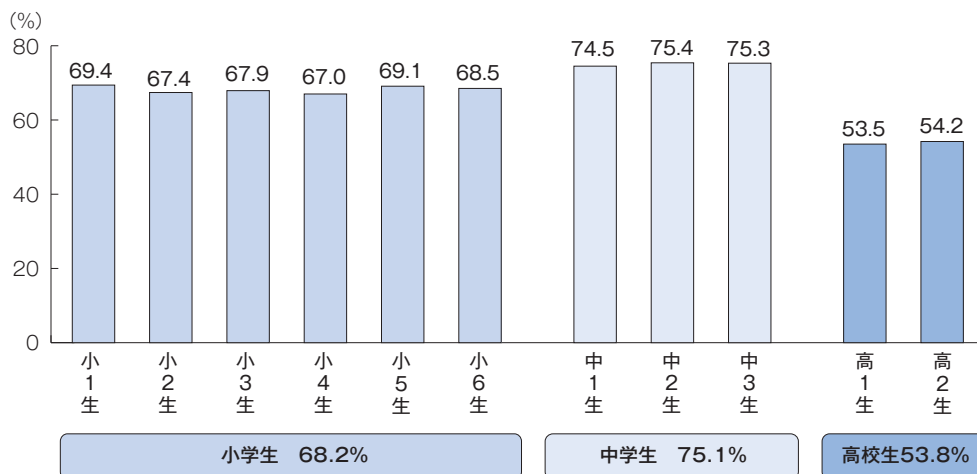
(1) 中学生の活動の特徴はスポーツと家庭学習

図8-1 スポーツの活動率（小学生・中学生・高校生・学年別）



注 スポーツの活動率は、「この1年間で、お子様が定期的にしてきた運動やスポーツはありますか」という設問に対して、「その他のスポーツ」も含む26の選択肢のうち、いずれかを選択した%。

図8-2 家庭学習の活動率（小学生・中学生・高校生・学年別）



注 家庭学習の活動率は、「この1年間で、お子様が家庭でしている学習方法や使っている教材はありますか」という設問に対して、「その他の学習方法・教材」を含む10の選択肢のうち、いずれかを選択した%。

小学生のスポーツの活動率は、小3生の72.4%をピークにそれ以降は徐々に低くなり、小6生では63.3%と、6割台にまで下がります（図8-1）。しかし、中学生になるとふたたび上昇し、中1生は72.5%と、小6生より9.2ポイント高くなっています。

一方、家庭学習活動では、小学生はいずれの学年でも6割台であるのに対し、中1生は74.5%と7割を超えます（図8-2）。中学生はどの学年でも7割台ですが、高校生になると5割台に落ち込み、中学3年間を通して、他の学校段階よりも家庭学習活動率が高いことがわかります。

(2) 活動の場は民間・地域から学校の部活動へ

表8-1 スポーツ活動の担い手（全体・小学生・中学生）

(%)

	全体	小学生	中学生
無所属	7.6	8.0	6.4
民間経営	42.1	55.1	16.5
地域ボランティア運営	8.6	13.2	4.9
自治体・公益法人運営	8.0	10.7	4.0
学校の部活動	23.0	6.0	61.3
学校の放課後活動	2.9	3.1	3.9
幼稚園・保育所運営	4.5	1.0	0.2
その他	3.3	2.8	2.8

注1 スポーツ活動をしている人（全体57.8%、小学生68.5%、中学生67.3%）の所属団体をすべて足し合わせて算出した。同じ人が複数活動している場合はそれぞれ1としてカウントしている。「全体」は本調査の対象となった3歳から高2生の値。

注2 「無所属」は「団体には所属していない（保護者が指導・個人の趣味など）」、「民間経営」は「民間企業が経営する団体・教室」「個人が経営する団体・教室」を合わせた数値、「地域ボランティア運営」は「地域や保護者のボランティアが行っている団体・教室」、「自治体・公益法人運営」は「自治体が運営する団体・教室」「公益法人やNPO法人が運営する団体・教室」を合わせた数値、「幼稚園・保育所運営」は「幼稚園・保育所の活動（有料のもの）」を示す。

注3 表中○は学校段階別で最大値、下線は2番目の値。

スポーツ活動は誰が担っているのでしょうか。小学生では民間経営が55.1%と、5割を超えています（表8-1）。次に高い地域ボランティア運営は13.2%で、民間経営と41.9ポイントの差があります。

中学生になると、学校の部活動が61.3%と2番目の民間経営の16.5%より44.8ポイント高くなっており、部活動が中学校のスポーツ活動の重要な担い手となっていることがわかります。幼児、高校生も含めた全体で見ると、最大値は民間経営の42.1%、2番目は学校の部活動で23.0%でした。

(3) スポーツへの期待が変化 — 体力づくりから社会性の涵養へ —

表8-2 スポーツ活動への親の期待（全体・小学生・中学生）

(%)

	全体	小学生	中学生
じょうぶで健康な身体になる	70.3	73.5	63.6
自分の目標に向かって努力をする	64.7	67.8	63.7
人に対する礼儀やマナーを覚える	64.3	66.3	62.0
仲間と協力する姿勢を身につける	63.2	64.1	61.8
身体を動かすことを楽しむ	61.3	65.5	51.0
自分の得意なことを伸ばす	59.8	62.9	51.7
ものごとに集中する力を身につける	56.5	58.6	53.2
よく考えて行動できるようになる	54.2	56.9	51.3
自分のことを自分でできるようになる	52.7	54.9	49.0
活動でストレス解消や気分転換をする	46.9	48.7	46.3
運動に対する苦手意識をなくす	43.7	49.2	34.3
勝つよこびや負けるくやしさを知る	40.8	44.8	40.5
集団をまとめる力やリーダーシップを身につける	24.0	24.1	25.8
選手としての技術が上達する	14.9	15.7	18.1
大会や記録会でよい成績をあげる	7.7	8.1	9.9
トップレベルの選手をめざす	4.1	4.4	4.8

注1 「お子様の運動やスポーツ活動に対して、あなたはお子様に次のようなことを期待しますか」という設問に対して、「とても期待する」と回答した%。「全体」は本調査の対象となった3歳から高2生の値。

注2 「>」、「<」は小学生と中学生を比較してどちらの数値が大きいか、「>>」は小学生と中学生の差が5ポイント以上あることを示している。

注3 ■ は、小学生と中学生の比較で差が5ポイント以上ない項目。

親は子どものスポーツ活動に何を期待しているのでしょうか。16の質問項目中、「とても期待する」の回答が一番多かったのは「じょうぶで健康な身体になる」（70.3%）、中学生に限れば、「自分の目標に向かって努力をする」（63.7%）でした（表8-2）。

そのほか、「人に対する礼儀やマナーを覚える」や「仲間と協力する姿勢を身につける」など、社会性にかんする項目も上位にあがっています。

以上のデータから、親は子どもに、スポーツ活動を通して、身体的、精神的なことだけではなく、社会性も身につけることを期待していることがわかりました。そしてその役割は、小学生は主に民間企業が、そして中学生は学校が部活動というかたちで担っていることがわかりました。